

水野斉入あて書簡（大正6年）を巡って

タイトル	水野斉入あて書簡（大正6年）を巡って
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第16号
ページ	43-47
発行年	2011.3.15
E-mail	sekihou@hazaway.com (能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）淨蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

水野齊入あて書簡（大正6年）を巡って

拝啓永らく御無音にて失礼候段、真平御免被下度候。昨日、金子3円正に受取申候。今日迄に2冊配本に相成候へば、今日送付致候。後勘定は致すべく候へども、1ヶ月分会費1割引にて壹円参15銭に御座候へば、豫め御承知を願上候。

音書面の趣きによれば御地方面、大雪にて御困りなされ候由。中庭の雪7尺とは実に驚入申候。折柄貴院御一同様御無事御消光被遊候由、目出度存居候。私も左程異常もなく勉強致居候間乍憚御休神被下度候。当地に於ては、今年の終り約一尺位積り候て、20年来の大雪なりとの事に候。其後、今年になりては2度程4、5寸位積り候のみにて候。1月10日、休暇より帰りし人々の話を聞くに、何処もみな近来稀なる大雪なりしとの事に候。難有いかな京都に於ては、前述の如く時々パラパラと雪積り候も時にしては室内にて火鉢にあたるより障子を開けて日光に当たる方心地よき程の日も有之候へば、寒いとは云うものの実に楽なものに御座候。然し、風の寒い時は、又お話にならぬ程厳しく唯火鉢を囲む外仕様のなき事も有之候。扱予て1月の宗報、2月6日の中外日報、2月5日の大阪朝日京都付録等にも出ており、又寺本婉雅氏より照会せられし事とて充分御承知之通り、寛叔父様の消息絶えてより、今年が丁度17年目に当たることとて南條、高楠、藤岡博士並びに本山役員、大中学教授等の方々ならりて誕生日なる5月18日をして当大学に於いて追悼会を勤め尚、講演会、遺物展覧会等を催さるる筈に御座候。又記念として遺稿出版せらるる事に、今その準備中にある事は云はずとも御承知の事と存じ候。就ては、去る7日、当大学にて寺本氏より私に来て呉れとの事にて早速参り候処。其時先生の申さるるには「右の件云々に就いてお前の父に遺物送る様にと手紙差出候に何の返事もなく、また水野氏へも書面差出置候に、これ又何の返答も無之て次には南條さんより手紙を出して貰ったが、今に返書に及ばず云々」とて、少々、立腹の様子見え申候。そこで私もよくよく考へ見るに波佐よりは兎も角として、貴殿よりは返事を出される筈なるにと、不審に覚え由候。それについて、お前からも手紙を出して置いて呉れと申され候いしかば、早速差出す考へにて居候処。昨夜6時、御通信に接し直ちに返事の高きされぬ理由を承知仕候。中庭の雪7尺も有之、毎日大吹雪致候ては、とても相談せらるることの出来ざる事、至極御尤もと存候。よって寺本先生の云はれたに就いて、この手紙と同時に波佐へも差出置候間、可成相談の出来次第相談成し下されて御返事書を御差出被下度願上候。寺本先生より送られし書面の趣きは如何なることに確かに存ぜず候へども御一人にて返事の出される事なれば、猶一層早く御差出を願上候。先は寺本先生のいはれたに就いて一応申述置候。尚、記念出版の書籍の表紙に就いて、寛氏の定紋の必要あればその紋がお前の羽織の紋と同じなれば、それを写して出して呉れと申され候間。早速、羽織の紋（タチオモガタ）を写し差出置候。別に寛叔父様の紋とては無之と存し居り候へども万一、寛氏の紋とて別に有之候へば早速、御報知被下度候為念申添へ候。

兼ねて小生もいつか寛叔父様の追悼会なり法事なり勤むればよいがと出来ぬながらも幾度か思居候処。今年は斯くの如き方々によりて、追悼会を営まれる事とて□□に□□嬉しく思居候。而て当大学の学長南條先生の発起にてこの大学にて催される事なれば猶ほ一層嬉しく感じ居候。寺本先生よりお前にも手伝をして呉れと申され候間。報恩の為め出来得る限り力を尽して手伝する都盛に候。

寛叔父様より寺本氏へ托して送られし経文、仏像等多く、当大学図書館に蔵してあるとの事に御座候。この追悼会に就いては初めて御案内はする都盛なりと申居られ候。

先は乱筆ながら御依頼まで。末筆ながら御一統様へ宜敷く御傳言被下度御銘々御自愛專一に奉存候。匆々不備

大正6年2月9日夜
広島県山県郡雄鹿原村 水野齊入殿

京都大谷大学内 能海法恵

拝啓過日は御書状を□はり□有□□候。□□故人遺稿漸く脱稿致候。その□□地図のみに候。本日中を以て遺稿〆切りと致度心積にて3月1日頃東京活版所へ附送致し度候間。故人の遺状、その他、写真等もあらば至急御送り下され度、会計編纂上にも都合有之候間、宜敷願上候。近々記念追悼会は5月6日と決定致候。そのせつには故人の遺物展覧会開催候間。御送り下され度候。

大正6年2月26日

京都下京区新町通鍵屋町東入

八木竹治郎方 寺本婉雅

広島県山県郡雄鹿原村 水野齊入様

拝呈先便を以て申上候。寛師遺稿中へ挿入可致同師写真一葉有之に付至急御送付相成度次第にては総て整理して候間。其有無を御通知に預かり度候。最早や昨日も無之候。御地の御返事のみに毎日相待申居候次第□は出版上に於て故障のなき様何分の御返事相成度□□候。この件に付て御返事なきときは日後は打切りと致し度候。左様御承□□□候。

大正6年3月6日

京都鞍馬口室町頭 真宗大学にて 寺本婉雅

広島県山県郡雄鹿原村 妙蓮寺 水野齊入様

拝啓3月7日付御状正に拝見仕候。故人の写真何とかして早く拝見致し度候。遺稿は□□□。御題字も頂戴致し高楠博士序文も落手、其他の事全て完成致し表装は頗る意匠を凝らし福田眉仙画伯は（小生の知人）は故人跋涉の打箭鏞以西迄旅行せられ因縁に依り特に揮毫を願はし候処、支那僧服を被て馬上悠々にして単騎大雪山を越えんとし、その下方に西藏式の家屋、高山の植物を植え方に大雪の險山を表はし三色版にて頗る勇壯の真景に御座候。□皆の上部には故人の絵紋を標し候。天皇、皇太子、各親王へ献本して大に故人の犠牲的精神を雲上に風靡せしめんの心組に御座候。真大講堂にて来5月6日を期にして追悼法要併に記念講演を開催、本山上局全部連技、帝大諸博士、各宗教学学生等の特招かなり全国の諸新聞社に故人の偉業を掲載せしむべく候。□□

御来示の趣き承知仕候。但し、御地にての御追悼法会の期日5月1日の夕方より4日迄と有之候が、実は小生非常の多忙に候。上京都帝国大学文科大学の受持授業は合悉5月4日（金曜日）にして又真宗大谷大学のも□日に当り候。尚其前即5月1日も両大学の□業日に相当致し候。然かし千歳区の故友の追悼法会御開催の故、帝大の授業を事故を作りて欠席可仕心□に候。如是に由て4月29日（日曜日）夜行にて京都を出発し、30日夕景、御地に到着可致し候間。5月1日、午前より追悼法会御開催相成候ては□何、小生は5月1日午後2時一席と夜一席講話致し、2日朝、御地出発、山陰道より三□地方を汽車にて帰京□度致候。其れ以上は日数の餘猶を有せず候。又それとも僅かに二席丈では余り淋しく思はるならば4月30日午前より御始め相成候はば。小生は4月28日（土曜日）朝、京都出発、可部地方にて一泊、29日中に御地到着30日午後2時より夜にかけ5月1日も同様に出演可仕候。然し、是は、小生に於いても甚だ英敷きことに候。何分、今回のことは、小生の全責任にかかり、5月6日真大に於ける記念追悼会の準備と製本発送方を其日の前、即4月28日迄、実に□致されはならぬ等の事情も有之候。尤もこの遺稿出版に付ては、南條老師は事務に御関係無之に候。真大の藤岡主幹に協力を願ひ候て、全く二人にて取計居る始末に候。依って先ず、5月1日、中二席位の講話にて御就業の度心□に候。この如き事情に候間、5月1日夕～4日迄との御予定なれど、何とかして、5月1日は、午前中より御開始相成候へば好都合と□々、□じ、5月1日は朝、日中御勤行ありて午後は講演のみに時間を割与せられ度こと切望致候。午後に於て、長き式の勤行あらば時間もかかり同時に聴衆の脳かは非常に疲労致し居ることと相成候ては、故人の偉業を讃嘆するも余り精神内に感染も薄き影響を与ふること有之候ときは、折角の法会も余り効果無之候と愚考仕候。故に小生講話の際は午後も、夜も共に勤行は

極感嘆（簡単）に願度、講演に一席約一時間半、若は二時間を要すべく不然されば故人の遺志を貫徹せしむるには余りに聴衆の脳頭が疲労しきって居候ては遺憾に存じ候。法会まで申上候。当5月6日、午後1時より京都真大に於ける記念追悼法会后講演には是非とも貴氏、同行等、御遺族御来拜を願度に候て、それらの日限も充分御勘定中に御算入願はされば5月6日の式には万一間に合はざる様なことありては遺憾この上もなきことと致し故、是非にも御地方の法会の日限を少しく剥操上げしを願はしくと存候。今回の事業にて先ず遺稿出版に金550円を要すべく候。この中80円は南條老師の寄付、100円は本山教学部より下賜残余は小生の負担に御座候。多少の賛同者へは製本一部づつ、□□□□丈けで購読を依頼することとして加分し□居候。只今にては90人以内に御面談、何□故人の旧友は今や年□を経過し実為□10数人に不過候。斯る事情なれば残金数100円は小生等の考慮中にて支□可仕候間。御安心□□□□藤岡主幹と協力可仕決定候。右様に候間決して御心配無く様願上候。一折の□も多少の因縁に御座候。□□未歳□□故人で生死を共にせしもの、その一人は亡くして□洋□嘆乾し□ひまもなく独まま幸に南師の御発声を主として期くは企てし次第に御座候。以上御返事申上候。御確定の上は御通知願上候や。□□不一。

大正6年3月14日

京都帝国大学文科大学 寺本婉雅

広島県山県郡雄鹿原村妙蓮寺 水野齊入殿

只今貴状落掌、拝読仕り候。皆々様御揃御無事に居らせられ候由奉大賀候。陳者、寛叔父様の峨眉山に登られし時身には喇嘛僧服を着し立ち左右に従僕と通訳兼語学教師とをつれたる三人連写の写眞は私が持ち出し、私の中学卒業の際の写眞を一処に蔵し置き候へば、只今その有り虜を書きて早速送る様波佐へ葉書を差出し置き候間、左様御承諾され度候。別封は南條先生へ写眞は寺本先生へ早速持参相渡し申すべく候間、御安神（心）され度候。朝鮮、藤村兄上先般某学視察の爲め、東京へ出張を命ぜられ8日朝鮮出發。姉上同道にて10日、午後2時40分京都に着し兄上は同日午後9時26分東京へ出發致され候。姉上は今井方に滞在致し居り候。19日か20日かには長浜に帰り29日迄には必ず京城に帰ると申し居られ候。先は、乱筆御報告まで。真宗大系未だ第三号刊行されず候。

大正6年3月15日

京都大谷大学内 能海法恵

広島県山県郡雄鹿原村 水野齊入殿

久敷御無沙汰被居候処。いつしか祇園の桜も咲き初める頃と相成候。高堂□と□□□無候。御消光より遊候や私と無事休暇を過ごしています。待ちに待ちたる御得度式も滞りなく御天気で相済み申候て、誠に喜ばしき極みに御座候。式の御様子は新聞にて御承知の事なれば是処には略申候。観月様、桃枝様の御進級を御祝い申上候。写眞の件、貴院方へ御頼みしてあるとの事宜敷御依頼申上候。先は御一同様の御健康を祈り申上候也。

大正6年4月8日

京都大谷大学内 能海法恵

広島県山県郡雄鹿原村 妙蓮寺様

拜復故人追悼会等京都に於ける開催日時5月20日（日曜日）と決定致候は、前便申上の通り南條老師満州巡回の爲め□□止まる義に付て□は変更致候次第。御諒承相成度候。本日故人追悼会報告書60枚小包にて御届申上候間御落手の上は貴檀家に宛皆乗氏の門徒等へ御配付相成度候。尤も能海法言氏元へは300枚小包にて發送候て、大学生能海氏（法言氏息）より事情關係被致致に御座候。本日より1500枚分夫々知人、官公吏人へ封筒入にて發送致候。本山宗報其他諸新聞へも広告の心□に候。小生は、今月29日（夜行？）京都發、貴地に出演可仕候。出發時間は追って御通知申上候也。

大正6年4月17日 午後4時

京都帝国大学文科大学教職室にて 寺本婉雅

広島県山県郡雄鹿原村 妙蓮寺 水野齊入殿

拝啓過日来堂御厚待に預り〇有御礼申上候。扱て東京より御送付申上げ候遺稿10冊の中、特製三方金五冊は御兄弟御3人宛各1冊づつ(代金2円づつ)御引交を願ひ、残2冊は御3人協同上に於て1冊を島根県知事へ御寄贈相成にて可然候。又1冊は波佐村村長へ金2円にて御引受せらるる様御交渉可然度致候。尤も小生村長に会見のせ〇申〇〇て村長も承知し居られる事に候段。貴下より直接御申入れて可然御取計〇〇〇候。尚残の普通の5冊同行及有志へ金1円80銭づつにて御配布相成度候。この外40部は近々送り可申上候間、夫々御尽力〇〇〇〇候。右の儀は大学主幹藤岡氏との協議に基て申上候間〇〇御了承相成度候。5月20日の追悼会には故人の遺物小包にて御送り届られ度候。以上。5月仕7日。

大正6年5月7日

真宗大谷大学 能海追憶会

広島県山県郡雄鹿原村 水野齊入殿

(大正6年5月13日付け転送)

京都東本願寺大門前 今井仙太郎方 妙蓮寺住職 水野齊入行

拝啓故人追憶会記念法要併記念講演会期日も遂に近付き候間。遺〇〇〇者〇〇御勸議相成致候。講師は東京より〇し導師は慧〇〇連枝を仰ぎ候て総入費も約900円に上り候次第。何卒今日御上京相成度待入候。遺稿10部貴地着致候哉。御返事できれば候。慰〇者の順に依じて御配本可然と致候。

大正6年5月15日

京都鞍馬口寶町頭 真宗大学内 寺本婉雅

広島県山県郡雄鹿原村 妙蓮寺 水野齊入殿

【水野齊入あて書簡の解説】

能海寛の横死情報が出兵先の岡田利喜太より郷里の友人小林久太郎へ書簡(明治38年6月24日付)が7月7日に配達された。早速、その様子が浄蓮寺へ報告された。浄蓮寺では緊急の総代会を開き、7月9日付書簡で即座に東京の南條博士に伝えられた。南條博士は情報収集に努める傍ら、関係者や各新聞社などへも情報を伝えた。

7月26日、早速、南條博士を中心に浅草本願寺において、追弔法会を行った。追弔法会は南條博士が導師を勤め南條博士から渡清以来の経過を報告。未亡人となった静子氏も参列して香を手向けた。哲学館大学長の井上円了は、弔辞の中で漢詩を即席で哀悼の一首を贈った。参列者は、普通教校の同志、桜井義肇、長沢則彦、梅原融。哲学館の同志、高島大円、安藤弘、境野哲海、安藤正純。子安善義、白山謙致、平松理英等友人多数が来会した。

7月26日の「時事新聞」記事を見た井戸川辰三は新聞紙上で横死は訛伝である旨の報道がなされた。井戸川は岡田利喜太へも同内容の横死誤報の打消しの内容が書かれた書簡(8月4日付)を送った。岡田氏は、その書簡を故郷の小林久太郎へ送り届けた。

反省雑誌社主幹の桜井義肇は友人の北京、順天時報社の松島宗衛に情報を伝え、松島は情報元とされる井戸川辰三に事の真意を確認して、井戸川から横死誤報の旨の書簡を受け、早速、東京の桜井氏へ、その書簡(8月12日付)を同封して、「ご一覧の上判断を……」と付記して届けた。その内容が桜井氏から南條博士を経由して、浄蓮寺へ届けられ、寛師の横死は誤報であったということで、関係者一同は、最悪の状況から脱し安堵したのであった。

追弔法会の散会後日、生死については、諸説ある中で、井戸川の新聞報道(訛伝)説を尊重すること

となった。

本山から能海寛の命日は、南條博士宛て、最後の書信の日付である明治34年4月18日を以て、寛の命日とされた。

そして、大正6年になって「17回忌」を寛師の誕生月を以て追悼法会を執り行うことが、浄蓮寺と京都、真宗大谷大学で計画された。

一連の水野斉入あて書簡は、京都真宗大谷大学で学んでいた能海法恵（兄法言の長男）、同大学教授の寺本婉雅から発せられた水野斉入宛書簡類によって、大正6年の「17回忌追悼法要」、「能海寛遺稿」の出版、「能海寛遺物展覧会」等の模様が、これらの書簡からせ垣間見えてくるのである。

先ず、浄蓮寺で執行された「追悼法要」には、寺本婉雅が京都を4月29日に出発して、5月1日に赴いて記念講演（2回）を行った事が判る内容である。「17回忌」を記念して、出版された『能海寛遺稿』は約550円の経費が掛かったこと。追悼法要などに350円程度の入費を要した事などが判る。遺稿集出版には、南條博士が80円、本山支出100円、残金は出版物の販売と寺本婉雅の負担で賄うとしている。浄蓮寺側には50冊程度の販売を割当てていた。中でも、天皇家への献本や島根県知事への寄贈もおこなわれたことがこの書簡で判明した。

大学で行われる「17回忌追悼法会」は、当初は、5月6日の予定が、南條博士の満州での巡回の都合で5月20日に延期となったこと。『能海寛遺稿』は4月末日に出版され、5月1日に浄蓮寺での記念法要に間に合わせるために寺本が奔走していたことが文面で読み取れる。5月20日に実施された大谷大学での追悼法要へ水野斉入が出席したことが、5月7日付、能海寛追憶会の葉書が京都東本願寺大門前今井方に転送されていることから判明する。能海斉入と寺本婉雅の関係上で、中国から発した能海寛の来信綴り一括が大谷大学へ寄託されたのであろう。

大谷大学図書館に南條博士によって能海寛の「将来品」の仏典・仏具のみが寄贈されたものであるはずであるが、一連の書簡内容によって、これらの物件以外の能海寛個人記述の文献が何故、今日まで大学博物館に、そのまま残っているのかが解明できた。『能海寛遺稿』編纂時に写真、追悼記念展覧会に遺品等を寺本氏の依頼で浄蓮寺から大学の遺品展覧会に送付されたものが一部そのまま残存したものと考えられる。

寺本婉雅はダルツェンドから巴塘まで能海寛と同行、生死を共にした探検家であった。寺本の献身的な編纂で成就した『能海寛遺稿』は、明治31年11月に神戸港を出港以来、中国大陸を2年半に亘り12,000Kmを踏破した詳細な記述が書簡により採録されているものである。内容的には、能海寛が現地から発出した本山宛て上申書、恩師の南條文雄、谷了然。友人の寺本婉雅、子安善義宛ての書簡を中心に編纂されている。「路程略」は、重慶から成都までのもので、第一回探検に臨む以前のものであること。ダルツェンドに滞在して仏典の英訳を完成して、喜び勇んでいる内容の時期の書簡が2通とも紛失したと称して、掲載されなかったこと。「般若心経」の4か国語翻訳は掲載されたが、外の「金剛経」、「弥勒菩薩誓願経」、「西藏ボン教の無量寿智経」などの英訳がなされたことが公にされなかったことなどが残念に思われるのである。

しかし、これらの不都合を補完すべく『能海寛著作集』の完成によって現存する能海寛の記述されたものは完全に収録された。よって、『能海寛遺稿』と『能海寛著作集』を併用して研究をされるようお勧めする次第であります。

（文責：隅田正三）